地を受け継ぐ　　詩編104篇1-35節　マタイ福音書5. 5　　　大澤秀夫

**はじめに**

　　礼拝へのお招き感謝です。松本教会での働き（1992～2008）の後、新潟、神奈川で働き、2020年に隠退して松本に戻ってきました。今は鈴蘭幼稚園で子どもたちと一緒に楽しく遊んでいます。子どもたちと過ごす中、思いめぐらしたことを今日はお話しします。

**１　神の造られたすばらしい世界**

詩編104篇は「主をたたえよ」という呼びかけで包まれています（1、35b節）。世界は無意味なものではない。神の愛と配慮によって造られ満たされている。ここには神による天地創造のすばらしさを賛美する、一人の個人、信仰者がいます（創世記1章参照）。

地は確かな土台の上に据えられ、揺らぐことがありません（5節）。地を覆う深淵は神に叱咤されて逃げ去り、境を越えて水が地を覆うことは禁じられました（6－9節）。

水は泉となり、川となって世界の隅々にまでゆきわたり、生けるものたちを養います。造られたものは住みかと食べ物を得て、安心して過ごします（10－18節）。

　神が季節を定められたので、太陽は沈む時、昇る時を知り、生けるものもまた、それぞれの命の時を知っています。（19－23節）。神の御業のすばらしさに、詩人は感嘆の声をあげます。「地はお造りになったものに満ちている」（24節）。

　海もまた生き物の活動する場所となりました。すべてのものは神に望みをおき、神はかれらを喜び、良い物で満たします。造られたものは神の息によって生き、息吹を取り上げられると、元の塵に帰ります（25－30節）。

　詩人は、神の栄光をたたえ、神に喜びの歌と祈りをささげます（31－35節。）

**２　神へのまったき信頼　「子供のような肯定の心」**

　　104篇の詩人は、造り主である神へのまっすぐな信頼を歌います。すべての被造物は神との生き生きとした交わりの内に、今この時、この場所で喜び、暮らしています。この詩には創造の世界に対する詩人の「子供のような肯定の心」が見られると、聖書学者の関根正雄は述べています。「たしかにそうだ」と思います。朝、子どもたちは「今日はどんな楽しいことがあるのだろう」という顔をして幼稚園にやって来ます。子どもたちは世界をまっすぐに肯定し、信頼して、今、この時を生きているのです。

**３　園を守る人**

しかし当たり前ですが、幼稚園では毎日いろいろなことが起こります。転んで泣きだす子、ケンカして取っ組み合う子、そんな時、先生たちは子どもの脇にしゃがみこんでたずねます。「どうしたの？」、「そうなんだ！」、「大丈夫だよ！」。共感と信頼が大切です。

神さまが子どもたちを祝福してくださることを信じ、神さまが愛してくださる子どもを大切に、希望をもって子どもたちと一緒にいる、それが幼稚園の先生たちの務めです。神がエデンの園で人に与えられた使命は、園を守ることでした（創世記2.15）。私たちもまた、私たちの生きている世界、園を守るようにと遣わされているのです。

　　「子供のように神の国を受け入れる人でなければ」（マルコ10.15）と、主イエスは言われました。私たちの足元に、神が創造し、祝福された豊かな世界が与えられています。子どもの心で世界を受け入れ、神の創造の業の完成を望み見つつ、歩いていきましょう。